

山形県川西町
下小松墳丘群小森山支群

K-860

第61・64号墳調査報告書



1986

川西町教育委員会

序

道伝遺跡等の調査を契機に、850名の会員を擁する川西町文化財保護協会の誕生をみました。このことは、町民の文化財に対する理解と愛情の深さの表明であり、心から敬意を表するものであります。

当町に待望の埋蔵文化財資料展示館が昨年9月に竣工いたしました。道伝遺跡、天神森古墳並びに川西一円の埋蔵文化財出土品の整理、展示を行い、早々の開館を目指しているところであります。

本年度は、下小松墳丘群、小森山支群第61・64号墳の発掘調査を、国の補助を得て実施したところであります。本報告書は、その発掘調査の概要をまとめたものであり、調査には、県教育庁文化課、明治大学教授大塚初重先生、山形県考古学会会長柏倉亮吉先生、同副会長加藤稔先生をはじめ、関係各位のご指導を受け、墳丘群の年代等の解明を行いました。下小松山一帯には、200基余の墳丘が、昭和58年度実施しました分布確認調査で踏査し確認を得ました後、考古学者の間で、古墳か中世塚かという論もあったと聞いております。

川西町教育委員会では、古墳として確認されたことから、貴重な文化財として保存と活用の面から、来年度において町独自で古墳の復元事業を考え、史跡の整備を行う計画であります。

下小松墳丘群の調査は、置賜地方の古墳文化を研究するうえで、新たな資料の提供となり、本報告書がその面の解明に役立ち、また、文化財に対するご理解を一層深めていただき、一助となれば幸甚と存ずるものであります。

最後になりましたが、本調査の実施並びに報告書作成に当たって、ご協力、ご援助賜わりました関係各位に深甚なる謝意を表するものであります。

昭和61年3月

川西町教育委員会

教育長 金子兵司

目 次

序	
目 次	
調査要項・例言	
※本 文	
I 遺跡の位置と概要	2
1. 墳丘群の位置と地形	2
2. 調査に至る経過	
II 調査の概要	3
1. 調査の方法と経過	2
2. 調査日誌	
III 調査の成果	5
1. 各調査区の概要 (1) 第61号墳 (2) 第64号墳	
2. 出 土 遺 物 (1) 土器類 (2) 鉄製品	
IV 総 括	14
1. 形態規模と構築	2
2. 年代	3
3. 結語	
※拡 図	
第1図 下小松墳丘群第61・64号墳位置図	1
第2図 第61・64号墳調査区	3
第3図 第61号墳主体部	6
第4図 各調査区土層断面	8~9
第5図 第64号墳主体部	10
第6図 出土土器実測	11
第7図 出土鉄製品実測	13
※写真図版	
図版1 下小松墳丘群遠景・調査前状況・調査区全景	
図版2 くびれ部遺物出土状況・第61号墳墓壙ブラン確認・第64号墳墳丘断面状況	
図版3 第61号墳第2墓壙床粘土確認状況・第61号墳第1号墓壙粘土確認状況・第61号墳第1号棺直刀出土状況・第61号墳第1号墓壙土層断面	
※附 図	
附図1 下小松墳丘群小森山支群第61・64号墳	
附図2 下小松墳丘群小森山支群第61号墳第1号棺出土	

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 下小松墳丘群、小森山支群、第61・64号墳
2. 所 在 地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1914-11
3. 調 査 期 間 昭和60年5月13日~同年7月25日
4. 調 査 主 体 川西町教育委員会
5. 調 査 総 括 藤 島 正 康(社会教育課長)
6. 調 査 主 任 藤 田 宥 宣(文化財専門員)
7. 調 査 助 計 月 山 隆 弘
8. 特 別 調 査 員 柏 倉 亮 吉(米沢女子短期大学学長・県考古学会会長)
大 塚 初 重(明治大学教授)
加 藤 稔(県考古学会副会長)
9. 調 査 協 力 県文化課・大道工務店・町文化財保護協会
10. 調 査 参 加 者 高橋宏平・黒沢一利・鈴木仙助・井上吉助・青木光雄・中島正巳
小松 智・岩見和泰・江尻 漢・佐藤 進・蒲生重夫・富樫恒雄
茂出木民子・横野幸司・小林英喜・伊藤玲子・佐藤直利・小林 孝
棚村順子・佐藤敬一・大崎郁子・藤倉徳夫・高橋啓一・高橋 誠
渡辺昭三・横山武幸
11. 地 権 者 佐藤 庄
12. 事 務 局 佐藤 庄

例 言

1. 本書は、川西町教育委員会が、昭和60年度に実施した、小森山支群第61・64号墳の発掘調査報告書である。
2. 採図縮尺は、それぞれにスケールを示した。
3. 土色は「標準色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修を活用した。
4. 本報告書の執筆、藤田、細堀、藤田・月山が担当し、遺物実測、高橋宏平・黒沢一利、トレースは月山が行った。
5. 本調査にあたっては、県文化課、佐藤庄一氏・大道工務店・元興寺文化財研究所・町文化財保護協会をはじめ、地権者並びに各関係機関の協力を賜りましたことを、記してこれを感謝申し上げます。



第1図 下小松塚丘群位置図

I 遺跡の位置と概要

1. 墳丘群の位置と地形

下小松塚丘群は、米沢盆地北西の丘陵地帯に位置し、山形県東置賜郡川西町大字下小松字尼ヶ沢・大堤沢・舞台山・薬師沢（その他）に所在する。川西町南西、玉庭丘陵から連なる丘陵で、土質は新第三紀中層である。標高は、220～280mの丘陵で、南側、東側斜面及び、尾根に墳丘が築造している。国鉄米坂線、犬川駅西方約1kmのところであり、丘陵の峠には、国道287号線が南北に走っている。

この墳丘群東側周辺には、古墳時代末から奈良・平安時代にかけての遺跡が確認されている。なかでも、昭和54年より4カ年発掘調査を実施した道伝遺跡は、8世紀末より10世紀にわたる地方官跡で、置郡都衙跡として推定される遺跡である。また、昭和58年度発掘調査を行った天神森古墳は、前方後方墳であり、出土遺物より4世紀末から5世紀初頭の築造であることが確認された。この他にも古墳時代の遺跡として龍蔵北遺跡等があげられ、遺跡の密集する地域である。

2. 調査に至る経過

下小松山は、昭和の初めより踏査が行われ、200～300基の墳丘があると云われていたところである。

昭和58年に川西町教育委員会が分布確認調査において、前方後円形の墳丘を15基確認した。これら墳丘の年代及び、性格が、考古学的に取り上げられ、問題となっていたことと、墳丘が現存する、なだらかな丘陵も少しづつ開発が進みつつあり、性格及び築造年代を早急に確認する必要から、三カ年の計画をたて、緊急調査を行ったもので、今年度調査が第1年度にあたる。

昭和58年度の調査では、下小松塚丘群の墳丘が密集して築造されている地域を、五つの支群に分けた。今年度は、その中でも顕著な墳丘形態を示す小森山支群を調査対象とした。この支群は特に前方後円の形を示すところから、種々の説が考えられ、注目された地点であった。

今回調査の対象とした第61号墳は、前方後円墳として下小松塚丘群の中で3番目の大きさをもち、周溝もしっかりととした墳丘である。また、丘陵の尾根に位置し、周辺が平坦であることと、発掘調査における出土品等の容易さを考慮し、第61号墳を調査することにしたのである。

II 調査の概要

1. 調査の方法と経過

今回の調査の目的は、下小松墳丘群における小森山支群の性格及び築造年代の基礎資料を得、今後の墳丘群の保存に資することである。最初に立木伐採の後、墳丘の実測を行った。調査区は図第2図のごとくトレンチをA～J区の10か所に設定した。

A区は、第61号墳後円部の周溝規模と版築状況の確認。

B区は、第61号墳後円部の中央部を発掘し、埋葬施設の有無及び、形態の確認。

C・D区は、くびれ部の周溝形態の確認。

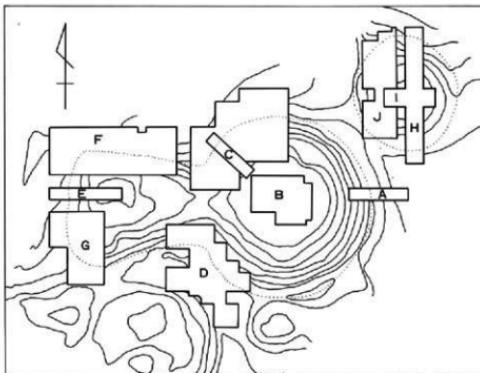
E・F・G区は、前方部の形態及び周溝の確認。

H区は、第64号墳の土層断面と、埋葬施設の有無及び形態の確認。

I・J区は、周溝の有無と形態の確認。

以上の10か所の調査区より、遺構プラン、遺物の確認を行い、墳丘及び周溝の規模・形態・構築前の地形及び築造年代を正しくおさえることをねらいとしたもので、調査総面積は、850m²である。調査は、5月10日より7月25日まで行い、埋め戻し作業も終了している。しかし、深掘りを行った調査区については、復土の埋没する可能性も考えられ、来年度、復元作業を行う計画である。

調査経過は、次の日誌のとおりである。



第2図 第61・64号墳調査区

2. 調査日誌

5月10日(金) 晴	G区周溝プラン確認 第1号墓墳掘り下げ
発掘調査録入式 町民30人参加	6月21日(金) 晴
5月13日(月) 曇り	明治大学教授大塚初重氏現地指導
調査事務所設置 調査前の撮影	6月24日(月) 曇りのち雨
5月14日(火) 曇りのち小雨	D区掘り下げ 第2号墓墳完掘
立木伐採 下草刈	6月25日(火) 曇り
5月18日(土) 曇り	第1号墓墳掘り下げ H区土層実測
調査地麻植土剥離開始	6月26日(水) 晴
5月30日(木) 晴	第1号墓墳粘土櫛検出 郡長視察
墳丘実測 調査区杭打ち 平板実測1/50	6月27日(木) 曇り
6月1日(土) 晴	R M 3～6検出 D区R P 2～4検出
各調査区撮影	6月28日(金) 雨のち曇り
6月3日(月) 曇り	R P 5検出
第61号墳平板実測終了 前方部E区掘り下げ	6月29日(土) 晴
6月4日(火) 晴	現地説明会 130名参加
第64号墳平板実測終了 H区掘り下げ	6月30日(日) 曇りのち小雨
ピット確認 R P 1検出	R M 3～6取り上げ作業
6月5日(水) 晴	7月9日(火) 曙り
第64号墳H区掘り下げ R M 1刀子検出	町総務常任委員視察
6月6日(木) 晴	7月10日(水) 曙り
K区掘り下げ	第2号墓墳土層実測部埋土掘り下げ
6月7日(金) 晴のち曇り	R M 8検出 第64号墳検出(第3号墓墳)
B・J区掘り下げ	7月12日(金) 曙り
6月8日(土) 曙り	各区周溝土層断面実測
E区掘り下げ終了	7月13日(土) 曙りのち小雨
6月10日(月) 曙り	墳丘調査区実測
C区掘り下げ終了	7月14日(日) 曙り
6月13日(木) 曙り	加藤稔氏調査指導
県文化課係長井藤庄一氏現地指導	7月15日(月) 晴れのち曇り
R M 2 検鉗検出	各調査区埋め戻し作業
6月14日(金) 小雨のち曇り	7月20日(土) 晴
県考古学会副会長加藤稔氏現地指導	埋め戻し作業終了
6月15日(土) 晴	7月21日(日) 晴
E区土層実測 B区掘り下げ	下小松古墳群遠祖追善鎮魂祭
6月17日(月) 晴	7月25日(木) 晴
A区土層実測 B・G区掘り下げ	機材搬出
第1号墓墳プラン確認	
6月18日(火) 晴のち曇り	
B区拡張 第2号墓墳プラン確認	
6月20日(木) 曙り	

III 調査の成果

1. 各調査の概要

(1) 第61号墳

A調査区

第61号墳後円部東側周溝の調査区は、第61号墳主軸線の土層断面を調査するために設けた幅1m長さ5mのトレンチである。周溝の覆土は4層に分けられ、黄褐色粘質土の土質で、下層になるにしたがい暗さをますものである。周溝幅は約1.5~1.8mであり、約40cmの覆土が堆積している。このトレンチからは遺物は確認されない。

B調査区（第61号墳主体部）

後円部の中央約5m×3.5mの調査区である。墳丘表土より98~100cmのところで墓壙プランを確認、しかも一部切合っている2つの墓壙である。最初に埋葬された墓壙を第1号墓壙、後に埋葬され第1号墓壙を切っているのを第2号墓壙とした。

第1号墓壙

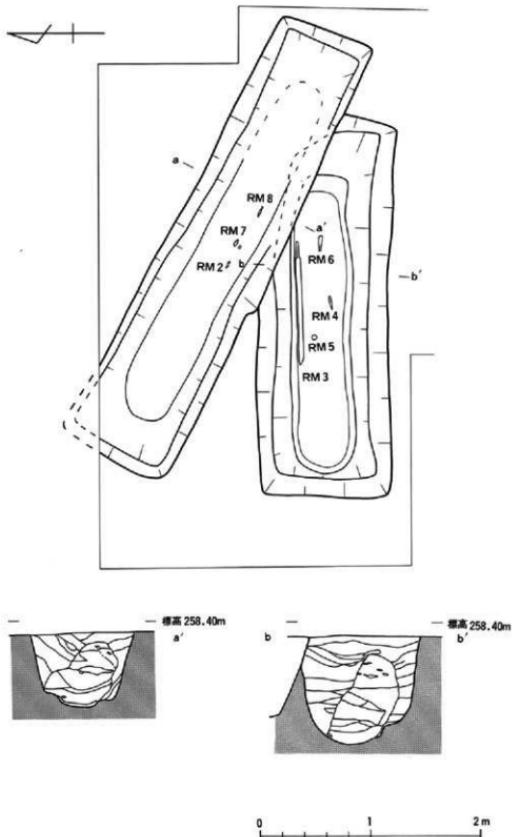
後円部中心墳丘表土より1m掘り下げると旧表土面となり、墓壙プランが確認された。墓壙は、主軸線によって造られ、幅（南北）1m長さ（東西）3.5mの長方形の大きさである。この確認面より1.3m掘り下げると墓壙底部にあたり、墳丘表土面より2.3mの深さである。墓壙中央部に直径0.6m、長さ2.7mの粘土櫛が設置されていたもので、底部はゆるやかなU字状をなし、床面は粘土が敷かれ、粘土が叩きしめられている。木棺の東側には、粘土塊が確認され、木棺を固定し、粘土で覆って密封したものと推定される。粘土櫛を20~25cm掘り下げ、粘土を取り除くと副葬品が確認された。副葬品の配置は、東西に長い楕円形の粘土櫛の中央部北側に直刀が、剣先を西に柄部を東に置かれ、直刀の先端近くより鐵環が出土した。また、粘土櫛中央部、直刀柄部付近より、鉄鎌の刃先が東向きに3個体まとめて出土した。副葬品は、同層位からの出土で、配置図は第3図のとおりである。

第2号墓壙

墳丘表土面下20~30cmより掘られた墓壙である。旧表土層確認面において幅1m、長さ4.2mの長方形の大きさで、第1号墓壙の東南角部で重なりあり、第1号墓壙を切っている。墓壙の底部には粘土が敷かれ、木棺直葬であるが、第1号墓壙のように木棺全体を粘土で覆っているわけではない。墓壙中央部より槍鉈が出土し、中央部よりやや東側にて刀子、鐵鎌が確認されている。遺物の出土配置図は第3図のとおりである。

C調査区

C区は前方後円墳くびれ部北側の周溝形態及び土層断面を確認するため、約8m×7m



第3図 第61号墳主体部

の調査区の表土剥離を行い、墳麓線をおさえた。この調査区では1m×5mのトレンチを旧表土面まで掘り下げた。この調査区における周溝の堆積層は基本的に5層に分けられ、厚さ45cmである。周溝には直径20cm前後と推定される河原石の一部が2層上面より検出したが、土器類は確認されない。

D 調査区

墳丘南側のくびれ部の周溝を完掘し、周溝を正しく確認するために、約8.5m×4mを調査したものである。周溝の覆土は3～5層に分けられ、厚さ40cmを測る。1層上面より河原石が1～2m間隔で確認され、この石の下、地山面上より土師器片が出土した。これらは壺1個体、甕底部1個体、甕体部片等である。第61号墳南側の第63号墳が当初、平面的に見る両くびれ部が直角をなすラインがあることから、前方後方墳の可能性ありと観察したものであった。そのためD調査区を拡張し、第63号墳後方部の墳麓の確認を行ったが、前方後方墳といいきれるだけの資料は得られず、しかもコーナーがゆるやかな円形を示すことから、断定することはできなかった。ただ、周溝からは、摩滅した土師器片が確認されている。

E 調査区

前方部先端の主軸線上の土層断面を調査したもので、幅1m、長さ5mのトレンチ掘りである。周溝は、幅1.5m、覆土の厚さ60cmで4層に分けられる。2層上面より長さ45cm、幅25cm、厚さ15cmの細長い河原石が出土している。前方部の土層は、1.2m掘り下げを行ったところで5層に分かれ、盛土は、土色より2層が確認された。しかし、盛土の土質はかわるものではない。また、特に叩きしめた所もなく盛土を行っている。盛土の厚さは、旧表土層より60cmである。

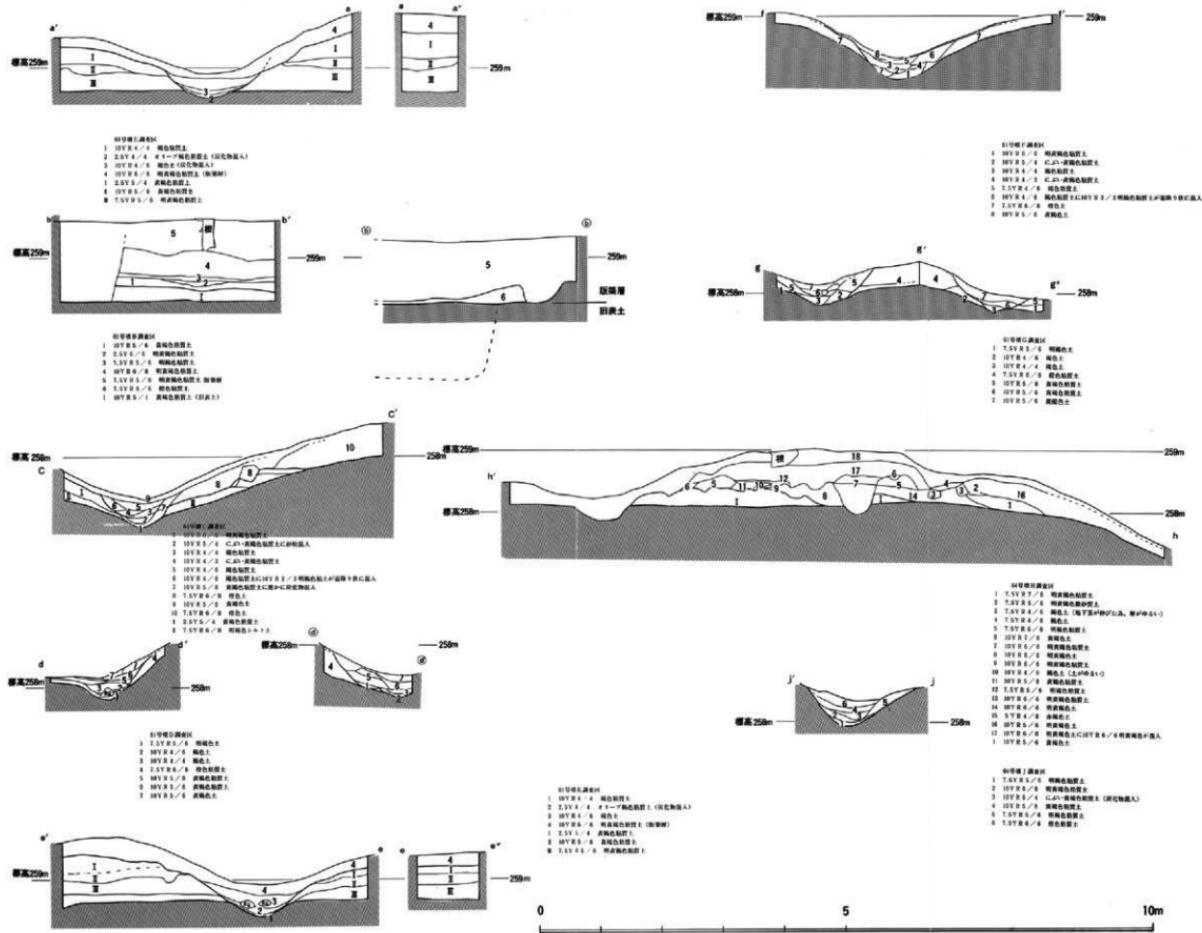
F・G 調査区

F区は前方部北側コーナーの確認のため10m×4mの調査区であるが、完掘を行ったものは、コーナーの周溝のみである。G区は、前方部南側コーナーの確認をするための3m×5mの調査区である。F・G区においては、前方部先端の墳麓線と前方部先端幅の確認をするため設定したものである。F区では調査前に確認した墳麓線とはほぼ同じであったが、G区においては調査前、墳麓線ととらえていたラインより内側に入る。周溝はE区同様で土師器片が出土している。

(2) 第64号墳

H 調査区

第64号墳を南北に幅1.5m、長さ10.5mのトレンチを設定したものである。トレンチの



第4図 各調査区土層断面

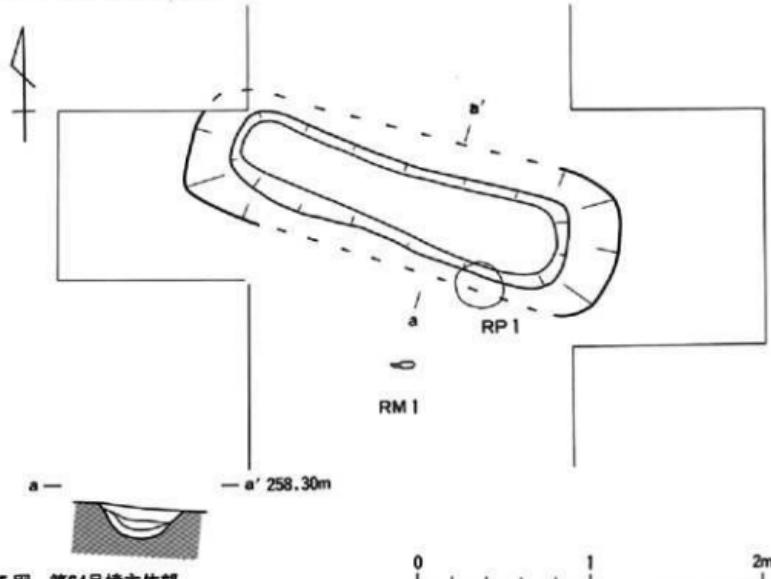
土層断面より、中央部に旧表土層の掘り込みが見られる。墳丘は、旧表土層より60cmの盛土である。南側の周溝は幅1m、覆土の厚さ45cmで4層に分けることができる。北側の周溝は浅く幅50cmであるが、周溝部より急斜面になり、周溝というよりテラス状と言えるようである。

I 調査区（第64号墳主体部）

第64号墳中央部土層断面より確認した掘り込みのある墓壙上面プラン確認のため、調査区を1m×2m拡張したものである。墓壙は、旧表土層より掘られたもので、長さ東西2.55m、幅0.8m、深さ0.5mである。墓壙主軸は、西で北に30度の傾きを示す。墳丘表土面より58cm下層から刀子が確認された。また、墓壙中央部よりやや東側に直径30cm、深さ30cmの土管状に焼成された土器のようなものが検出され、中に炭と焼成された土が確認された。墳丘上で焼成されたものではないようであり、墳丘築造時に設置されたものと推測される。

J 調査区

第64号墳西側周溝部3.5m×1.5mの調査区である。当所、墳丘確認踏査において墳籠が直角をなすところがあり、方墳とも考えられたが、周溝の掘り下げによって円墳であることが判明した。周溝幅1~1.5m、覆土は4層に分けられる。この掘り下げにおいて土師器の摩滅片が確認された。



第5図 第64号墳主体部

2. 出土遺物

(1) 土 師 器

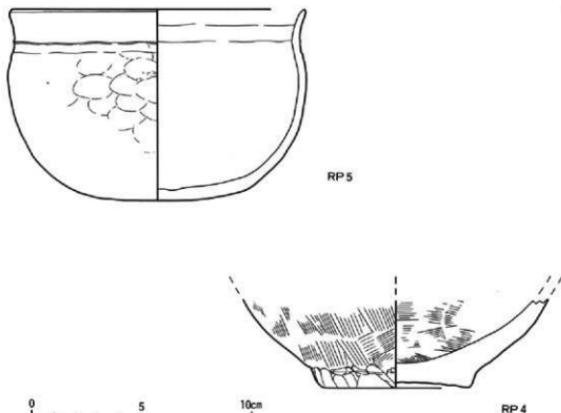
61号墳調査地周溝内より約125点の土師器片が検出できた。しかし、接合するものが少なく、復元されたものは、杯1点である。出土土師器片より、約6個体分と推測できる。

RP 4

この土器は、壺形土器の底部で、体部方向にかなり広がるものと推測できる。内面は横位のヘラナデ、外面は斜位のハケ目、底部外面は指による圧痕がみられる。底部径6.7cm、現存高は4cmである。

RP 5

この杯は、土師器杯で唯一の復元できたものである。口径13.4cm・器高8.6cmを測る。九底で体部は球形に近くふくらんだ丸味を持ち、口縁部はやや外反し、ほぼ垂直に立ちあがる。内外面とも表面が摩滅し、調整を確認するのはむずかしい。しかし、体部外面の凹凸よりヘラケズリを行ったのちナデ調整し、口縁部はナデのように推察できる。この杯は、第61号墳南側くびれ部周溝の墳丘側壁面、地山層直上より検出したもので、墳丘上部よりおちこんだものと思われる。



第6図 出土土器実測

(2) 鉄 製 品

第61・64号墳主体部から鉄製品が検出された。しかし、土器類、勾玉類は出土されなかつた。鉄製品は出土後、元興寺文化財研究所において保存処理を施したものであり、その際の処理報告をもとに説明するものである。

R M 1 刀子、第64号墳出土

刀身の切先側と柄部の尻が欠損しており、現存長10.4cmを測る。刀身は平鍊平造りであり、現存する茎の長さは4.3cmである。把木には漆と見られる黒いものが付着している。柄部は、本来の形よりも丸く丸められ、刃部は丸みを帯びている。

R M 2 鉤（槍頭）第61号墳第2号木棺出土

刀子若しくは鉄鎌と考えられるもので、現存長8.1cm以上あり、幅1.5cm、厚さ0.5cmである。

R M 3 直刀、第61号墳第1号木棺出土

刀身は、平鍊平造り、切先のふくらつく直刀である。現存状況は良好で、刀身には¹木片の残っており、全長105.1cmである。刀身長82.4cm、刀身元幅4.3cm、刀身先幅3.5cm、刀身重ね0.9cm。柄部現存長22.7cm、柄部直径2.9~3.2cmである。柄部分の構造は柄木の背部から茎を落し込んでおり、その後、刃区部より7cmと12cmの所を目釘で止め、繁巻きで固定しているものである。

R M 4 刀子、第61号墳第1号木棺出土

現存長8.6cm、刀身5.1cm、茎長3.5cmである。

R M 5 環状鉄製品、第61号墳第1号木棺出土

最大直径4.1cm、孔内径1.2cm、厚さ1.2cmであり、環内部は中空部が多い。

R M 6 鉄鎌、第61号墳第1号木棺出土

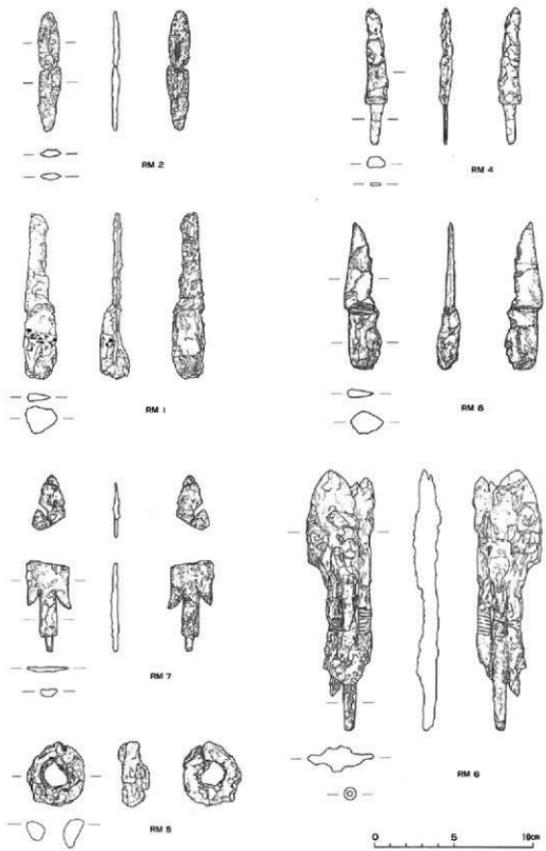
異なる鉄鎌3個体を有機質が覆っており、基は有機質（竹様の木質5~7cm）の残存が良好で中は空洞になっている。3個体のうち1個体の根が幅広く、最大3.3cmで他は1cmの長頸鎌である。鉄鎌の形は明瞭に確認することは難しいが、基部近くの矢竹には、平たく薄い有機質（樹皮？幅3~4mm）でしっかりと巻いて固定しているのがわかる。

R M 7 鉄鎌、第61号墳第2号木棺出土

現存長10cm以上のもので、幅2.9cm、左右に非対称の折り返しを持つものである。横断面は、凸レンズ状の平根である。根は形状不明。

R M 8 刀子、第61号墳第2号木棺出土

現存長9.2cmあり、刀身は平鍊平造りによるものである。柄部長は3.8cmで柄尻は欠損している。柄尻の片側に金具が残存し、刃部は薄い。



IV 総 括

1. 形態規模と構築

今回の調査で、第61号墳の規模については、3年前の踏査時とはほぼ同様の数値を得ることができた。しかし、周辺の調査において、前方部南側の墳壇線がやや内側に入り、前方部先端幅が狭くなっていた。また、第64号墳は、円墳の直径約9m、高さ1.2mであることが確認された。

調査の結果、第61号墳は、周辺最深部より計測し、全長25.5m・後円径15m・前方部前端幅9m・後円部高約2m・前方部高1.4mの小型の前方後円墳である。

平面形では、主軸線に対して前方部がねじれることなく、ほぼ左右対称である。しかし、古墳の立地する所は北側が高く南側が低い。その標高差の分だけ墳壇が伸びるものである。そのため、周辺の造りも、墳丘北側の方が大きく、南側はテラス状となる。周辺底部の標高差により、雨水等は後円部南側に流れるように造られ、排水の便を考えた造りになっている。

墳丘における全画面の想定の説を利用して、後円部の径の1/6を基準単位として計測すると、6:4.2の前方後円墳となり、前方部は主軸方向N-90°-Wとなる。

各調査区の土層観察により、古墳築造時、旧表土層を1.3m掘り下げ墓壙を造り1号棺を埋葬したことが確認できる。旧表土面で特に粘りのある粘土を使用し、約10~20cmの厚さにはり付け密封し、その後周囲になる部分の土を掘り、墓壙上に盛土する手法を用いて古墳を築いたものである。その後、追葬された第2号棺を埋葬するため、墳丘頂上部より掘り下げを行い第2号墓壙を造り、それに第2号棺を安置したものである。この第61号墳は、当墳丘群の15基ある前方後円墳の中で最も周囲のしっかりしているもので、隣接する古墳の周囲より20~30cm深くなっている。この周囲の深さの違いは2号棺が追葬されたとき二度目の墳丘整形が行われたものによると推察すると妥きとするようである。墳丘は無段構築で後円部墳丘上は平坦であり、中央部に若干窪みがみられ、この窪みが木棺埋葬部と一致する。第61号墳に隣接する前方後円墳の長い橢円形の窪みについても墓壙によるものと考えられよう。墓壙の主軸線は第1号墓N-90°-W、第2号墓N-65°-W、第3号墓N-70°-Wである。

2. 年 代

古墳の築造年代を考える場合、墳丘の形態・主体部の築造法・主体部の副葬品・周囲からの出土遺物等が重要なものとなる。

墳丘の形態は上田宏範氏の理論によると、 $B:C:P = 6:2.48:1.72$ となり6:4.2型式の4世紀型となろう。しかし、この墳丘と同様な古墳が群集し、多数あることか

下小松墳丘群遠景
(南東から)



ら型式で論ずることはできないようである。本調査において、主体部の造りは、木棺直葬であった。東北地方で木棺直葬の埋葬形態が確認されているのは、山形21基・宮城4基・福島5基である。県内の例は、山形市漆山の衛守塚2号墳・同市青野のお花山古墳群17基と本調査地の3基であり、確認している21基の古墳が有する籠竹形木棺の全長は5m以下のものである。これまで東北地方に確認されている古墳の埋葬形態で、地山層を掘り込み主体部を築く手法は、県内の木棺直葬とされる例すべてがこの形をとっている。また、宮城の六反田古墳（墳丘不明）、福島の加倉古墳群3号墳・高見町1号墳・高野古墳等が県外の例として挙げられる。以上が円墳の例であるが、前方後円墳としては下小松古墳群第61号墳の1例が認められるにすぎない。

築造年代を考えるに、山形市のお花山古墳群は、5世紀末から7世紀前半であり、その他の木棺直葬形態の古墳はすべて5世紀代に築かれたと考えられている。

下小松古墳群第61・64号墳の年代を推測するには、第64号墳出土刀子と第61号墳第1号棺出土の直刀・鉄鎌・刀子等の副葬品をあげることができる。今後、これらの副葬品と類似する資料を収集し、年代を決定してゆきたい。現時点までの調査では、主体部築造形態から、5世紀末から6世紀前半の築造と考えている。

3. 結 論

本調査により、下小松古墳群5ブロックの中における小森山支群は、5世紀末から7世紀にかけて築造された古墳群であると推測できる。数年前まで、本県南部・置賜地方の古墳は横穴式が主流を占めるものと考えられていた。古墳築造年代においても、山形盆地は5世紀代、置賜地方では、6世紀以降、つまり奈良時代前後の古墳時代終末期という見方であった。しかし、この7~8年の間、方形周溝墓・箱荷森・戸塚山・天神森等の大規模古墳の確認で、置賜地方の古墳文化は2世紀あまり遡りの結果となり、のことから、日本海側の大型古墳の北限に位置するといえる。

このように古墳調査研究がすむなかで、下小松古墳群の小森山支群15基の前方後円墳が、一地域としては数多く密集することなどから注目され、また、古墳として疑問視する動きもあった。今後、調査研究を継続し、川西町の古墳の全貌をまとめて報告したいと考えている。

引用・参考文献

- 1979 上田宏輔 「前方後円墳（第2版）」
- 1983 矢沢町行会 「七軒横穴群」
- 1985 法政大学 「木屋敷古墳群の研究」
- 1985 山形県教育委員会 「お花山古墳群」 山形埋蔵文化財調査報告書 第85集

調査前状況



調査区全影



くびれ部遺物出土状況



第61号墳 墓壙プラン確認



第64号墳 墓丘断面状況





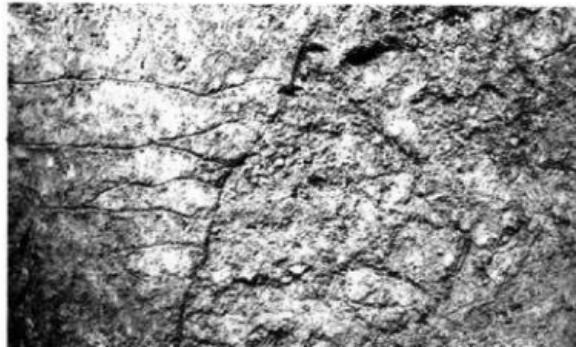
第61号墳 第2号墓壙床粘土
確認状況



第61号墳 第1号墓壙粘土
確認状況



第61号墳 第1号棺直刀出土
状況



第61号墳 第1号墓壙土層断面



RM 2



RM 4



RM 8



RM 1



RM 5



RM 7



RM 6

RM 3



RP 4



RP 5

出土遺物 4 図版



緑と愛と丘のある町

下小松塙丘群小森山支群

第 61・64 号墳調査報告書

昭和 61 年 3 月 18 日 印刷

昭和 61 年 3 月 20 日 発行

発行 川西町教育委員会社会教育課

印刷 梶上ねざわ印刷